

里長日下部君牛脊

□ 疾病しつぺい為依のたもたら

□ 日下部牛脊

里長日下部君牛脊

これは、大宰府跡西側の蔵司地区から出土した木簡です。台地の西に接する谷間から出土した9点のうちの一つで、台地上からの投棄、あるいは流れ込みによるものと推定されています。

表の記載は、本来の漢文なら「依し為疾病べいのたもたら」とあるべきところで、語順が違っています。これは、「疾病の為に依り」、つまり日本語の語順通りに漢字を配列して記したものと考えられます。類例に大宰府跡南側の不丁地区から出土した封緘木簡ふうせんぼくかんがあります。

裏面には「里長日下部君牛脊」という人名がみえます。里長とは、里ごとに在地から任用された責任者のことで、『万葉集』に収められた山上憶良の「貧窮問答歌」に登場することでも知られています。また日下部というウジ名は、平安時代の観世音寺文書には府官層として現れますから、もともと在地性のあった氏族なのでしょう。この木簡は欠失部分が多く、どのような内容かはなかなか分かりませんが、表の記載によつて、病気を理由に休暇を取った、いわば休暇届のようなものだともいわ

太宰府人物志

資料室だより ⑤⑥

れています。

ところで、昨年からこの蔵司地区台地上の調査が九州歴史資料館によつて行われています。「蔵司」は現在も小字として地名が残っており、平安時代の記録にも、大宰府の実務を分担した部署（所司）の一つとして「蔵司」という名称が見えるところから、以前から注目されていた地区なのです。まだ、表面採集と

試掘調査という段階ですが、それでもいくつかの貴重な成果がもたらされています。何よりも重要なのは、ここから大量の鉄鏃てつそく、また甲冑の小札こざ、鉄刀の一部などの武具が発見されたことです。このことは、新聞報道、また広報だざいふ前月号「太宰府の文化財」でも取り上げられましたので、記憶に新しいところでしょう。先に述べた平安時代の記録から知られる蔵司は、当時の調庸物ちょうようぶつであった絹や綿の収納、あるいはその京進に責任を負っていた官司として登場していますが、今回の調査によつて、この場所にある時期には、大量の武具が存在していた可能性が出てきました。これらが何のためなのか、また「蔵司」との関連はどうか、といった点は、今後の調査に委ねられているといえます。